法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

アルフレート・リュールの境涯 : リュール生誕100年記念コロキウム報告書によせて

山本, 健児 / Yamamoto, K.

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
52
(号 / Number)
3・4
(開始ページ / Start Page)
286
(終了ページ / End Page)
260
(発行年 / Year)
1985-03-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030461

アルフレート・リュールの境涯

——リュール生誕100年記念コロキウム報告書によせて——

山本健児

1984年9月から10月にかけて，筆者はドイツ民主共和国に約1カ月間滞在する機会を得た。これは法政大学とフンボルト大学との間の研究交流協定に基づいて与えられた機会であって，筆者は主として2つの目的をもってこの国を訪れた。ひとつは，かつて存在していたはずの南北の地域間格差がどのように推移したかを現地の観察によって考えてみること，いまひとつは大戦間期に活躍した経済地理学者アルフレート・リュール（Alfred Rühl）の文献を蒐集するとともに，彼に対するこの国での評価を知りたい，ということであった。ここでは後者に関してその一端を報告したい。

*

フンボルト大学で上記の両テーマに関して筆者の世話をしてくれた地理学部門のシェルフ Scherf 教授は，アルフレート・リュールを専門に研究している人がドイツ民主共和国にいること，従ってリュールに対するこの国での評価を知るためには，なによりもその人に会うことが必要であるとしてそのための機会を設定してくれた。その研究者は，マルティン・ルター大学（ハレ＝ヴィッテンベルク）地理学部門のハルケ Harke 教授である。教授とは，9月26日に昼食をはさんでかれこれ3時間ほど話をすることができた。その際，筆者は教授からアルフレート・リュール生誕100年記念コロキウムの報告書（Harke（Hrsg.），1984）の贈呈を受け，これの書評を日本でしてもらえれば有難いと依頼された。筆者はそれを承諾した

が，帰国してからこれをゆっくり読んでみると，単なる書評よりも，研究ノートの形で紹介する方が適当だろうと思うようになった。というのは，筆者は既にアルフレート・リュールの略歴と業績，それに対する我国とドイツ連邦共和国での評価について若干論じたことがあるが（山本，1983），それとこのコロキウム報告書とはかなり重複している所があること，しかし当然のことながら筆者が前稿執筆段階で知りえなかった事実が多く明らかにされているし，フンボルト大学での筆者自身の調査や帰国して後あれこれ読んで得た知識などでコロキウム報告書に書かれていることを補足して紹介する方が，新たな研究の地平を開くことになるのではあるまいか，と感じたからである。

＊＊

まず，コロキウム報告書にもられている内容をざっとみておこう。これには，ハルケ教授による序文とリュールの遺影[1]のほかに，8篇のオリジナル論稿，エストライヒによるリュール追悼文（Oestreich, 1936）の再録，リュールによる論稿一覧，リュールによる書評一覧（但し，ごく1部のみ），リュールの論稿に対する書評一覧，執筆者一覧，英文要約及び露文要約が載っている。リュールによる論稿や書評の概要については，既にディーデリヒ（Diederich, 1938）の手になる目録があるが，これは完全でもないし不正確なところがあることを筆者は指摘しておいた（山本，1983，p.16）。その欠点がコロキウム報告書ではある程度是正されているし，リュールの論稿に対する書評を発掘したという意味で資料的価値もあると言えよう。

コロキウム報告書の主要部分をなす8篇のオリジナル論稿の執筆者と標題は次の通りである。

①H. ハルケ「アルフレート・リュールの生涯とその最も重要な著作諸段階」[2]

②H. ハルケ「アルフレート・リュールの世界観・哲学上の基本的立場」[3]

③E. ローゼンクランツ，H. シュルツ「自然地理学に関する著作」[4]

④H. ハルケ，G. ヤーコプ「交通地理学に関する著作」[5]

⑤M. ディシェライト「イデオロギーの経済的意味に関する研究」[6]

⑥H. ハルケ「立地問題に関する著作」[7]

⑦H. ハルケ「国際的分業の問題に対するリュール」[8]

⑧I. パウルカート「地理学の発展状況に対するアルフレート・リュール」[9]

執筆者の構成が上の通りであるから，コロキウムはひとえにハルケ教授の尽力によって開催されたものであることがわかる。尚，ローゼンクランツはマルティン・ルター大学講師，ディシェライトは同大学助手，シュルツとパウルカートはフンボルト大学教授，ヤーコプはフリードリヒ・リスト交通大学（ドレスデン）の交通・経営学部門の教授である。

8篇の論稿のうち③から⑧は，リュールの著作を年代順に整理し一定の共通する論題をもつものをひとまとめにして紹介し，評価を与えたものである。筆者は前稿でリュールの業績を大きく3つの分野にまとめたが，そのうち経済地理学方法論に対する評価は⑧のパウルカートの論稿で，経済の地域的差異と変動に対するリュールの貢献への評価は④，⑥，⑦の論稿で，そして筆者が「民族の経済的エトス論」という1節で紹介したものに関しては⑤のディシェライトの論稿で評価がなされている。又，筆者が門外漢であるが故にその紹介をほとんど全く何もしなかった青年リュールの研究対象である自然地理学研究への評価は③の論稿でなされている。

この自然地理学研究のうち，カタロニアの地形に関するもの(Rühl,1909)の中に不正確なところがあり，既にスペインの地質学者や地理学者によって訂正されている（Harke (Hrsg.), 1984, S. 31）という指摘を除けば，総じていずれの論稿もリュールの業績を高く評価するものとなっており，生誕100年記念コロキウムを開くほどであるから当然のこととはいえ，全体としてリュール讃歌の報告書となっている。特に印象的だったのは，自然地理学研究でも経済地理学研究でも（後者の場合には立地問題の業績で特に顕著であるが），リュールが発達即ち動態の解明に精力を注いだとい

う指摘である。これとあわせて興味深いのは，ハルケ教授の②の論稿で主張されている内容である。教授によれば，リュールは次第に唯物弁証法の思想をもつようになったというのである。

そのような世界観をもつものが果たして民族の経済的エトスを問題にするのか，少くとも筆者がスペイン人の経済精神に関するリュールの著作（Rühl, 1922）を読む限りにおいてはそのような点を認めることができない，ということを話題にした時，ハルケ教授はリュールが最初から唯物弁証法の考え方に立っていたのでなく，次第にその方法を獲得していったこと，民族の経済的エトスについてもその最初の研究であるスペイン人に関するものは駄目であるが後のものに属するアメリカ人の経済精神に関する研究（Rühl, 1927）はすぐれたものになってきている，と答えた。これとの関連で，リュールが民族の経済的エトスなどというものに深いりせず，これにかえて農業の立地問題の研究（Rühl, 1929）にうちこんだのは経済地理学の発達にとって幸いであった，とハルケ教授は主張していた。

このような評価が妥当かどうかを判断することは，今はできない。リュールの経済地理学方法論にしても，その生涯を通じて必ずしも最初から最後まで一貫していたわけではないことを示すものとして筆者によって注目された「イタリア人国外流出の地理的要因」（Rühl, 1912）という論文は，コロキウム報告書の中のいずれの論稿においても重要なものとして取りあげられているわけではない。又，これらの著者たちと筆者とが共通に読んだものであっても，同じ読み取り方がなされているわけでは必ずしもないし，このことは翻って，前稿執筆段階で入手しえなかったリュールの著作を読めば，コロキウム報告書の執筆者たちと異なる読み取りを筆者がする可能性もあることを意味する。今回の訪独でそうした文献のかなりを蒐集する見込みもついたので，②から⑧の諸論稿に対しては，筆者の前稿での解釈を反省しつつ，あらためて別の機会において取りあげることにしたい。

尚，リュールが唯物弁証法という方法論をもっていたとする評価は，昔

からドイツ民主共和国でなされていたのではない。ザンケ（Sanke, 1960）は，環境決定論と単一の地理学に反対し経済地理学を経済学の1部門としたという点でリュールを高く評価しつつも，しかし結局のところ観念論から脱却できなかったとして批判していたからである（邦訳，『地理』第16巻第5号，pp. 64—65）。ザンケの評価とコロキウム報告書での評価とは，この点に関する限り，いわば180度方向を異にするものとなっているのである。

この点はさておくとして，本稿で主に紹介するのは①のハルケ教授の論文であって，これはリュールの生きた時代の地理学思潮を考えるのに大いに役立つものである。最初に，新たな研究の地平が展望しうるのではないかと書いたのは，実はこのことと関連している。筆者は，前稿の限界のひとつがリュールの生きた社会・時代状況にまで考察を及ぼしえていないことにある，と認めておいたが，この欠をわずかながらも補うことができれば，と考えて本稿を草した次第である。

＊＊＊

ハルケ教授の第1論稿から，次のような新しい事実を我々は知ることができる。

まず，リュールが1912年[10]にベルリン大学に奉職することになったのは，アルブレヒト・ペンク（Albrecht Penck）の要請によっているということである。これは，このコロキウム報告書に再録されているエストライヒの追悼文の中でも暗示されていた[11]ことであるが，ハルケ教授はそれをフンボルト大学文書館に保存されている資料（Penck, 1912 a）によって明らかにしている。筆者はフンボルト大学のパウルカート教授から，ペンクによるリュールに対する鑑定書（Penck, 1912 b）を入手することができたが，これによっても彼のベルリン大学就任がペンクの意図に基づいていたことは明らかである[12]。

ペンクはリュールに何を期待したのであろうか。経済地理学をディレッ

タンティスムスから科学に高めることがペンクの願いであり，それがリュールに期待された，とハルケ教授は書いている（Harke (Hrsg.), 1984, S. 8)。しかし，そのための方途をペンクは示さなかったとも書かれている（Harke (Hrsg.), 1984, S. 8)。とはいうものの，文書館資料から引用されているペンクの文を読むと，ハルケ教授の言うようにその方途が具体的に示されなかったのだとしても，どのような経済地理学が期待されていたかは明らかである。ペンクの言葉は次の通りである。

「ラッツェルに由来する提案は持続していないことが判明している。つまり人類地理学の営みは昔も今もいろいろと多かれ少かれディレッタント的であり，とりわけ経済地理学と呼ばれる部門ではそうである。海洋学教室は経済地理学の総体的発展に対して重要な影響を，もしこの学問の育成にたずさわるならば及ぼしうるものである。そしてそれは，国民経済学にとって重要であるにちがいない。なぜならば，自然の前提条件を詳細に評価することなしには，世界貿易や世界経済の問題に対する深い理解はなしえないからである」(Harke (Hrsg.), 1984, S. 8)。

この文章から，ペンクが期待した経済地理学とは，後にリュールが分類した5つの立場（山本，1983，p. 22）のうち経済にとって重要な自然地理の一部を扱うものか，あるいは環境決定論的なものであったことは明白である。このことは，上記の鑑定書に次のように書かれていることからも読みとれる。

「そうしたことすべての中に現われ出ている特殊地理学的な観察方法に対するそのセンスの故に，私はリュールを海洋学教室の分科長として招聘したいと思ったのである。彼の各国誌に関する理解力の故に，本教室があたるべき経済地理学的自然の問題を取り扱うのに彼は特に適していると思う」(Penck, 1912 b, Bl. 26)。

リヒトホーフェン von Richthofen なきあとのドイツ語圏における地理学界で，最高の名声を博し大学という世界で権力をも握っていたペンク[13]にかくも嘱望されたリュールがベルリン大学で実際に行った研究活動はい

かなるものであったろうか。これについては既に前稿で述べた通りであり，同時代の地理学者からは地理学に属さない別物とみなされていたらしいことも指摘しておいた（山本，1983，pp. 3－4及び p. 8の注10)）。それは，バッティマー（Buttimer）との対談におけるハルトケ（Hartke）の「アルフレート・リュールから私は深い印象を受けた。たとえ彼の考えが当時のほとんどの『善良な地理学者たち』によって歓迎されないものだったとしても，幾人かの若い学生たちは熱中していた」[14]（Buttimer，1983，p. 230）という言葉からも明らかである。我々がハルケ教授の第1論稿から知りうる事実のひとつは，まさしくこのことと関連している。結論から言えば，リュールの研究活動はペンクを初め同僚や上司の気にいるものでなく，そのためペンクとその後継者クレープス（Krebs）がリュールの正教授昇任に反対し続けるという程に，両者の関係は悪化したらしい。

ハルケ教授の記述に従えば，ある時期にペンクは，リュールが即刻その講義内容を変えることを要求したとのことであり，さもなければリュールがベルリンでこれ以上講義を続けることを不可能にすると脅したとのことである[15]（Harke(Hrsg.)，1984，S. 17)。リュールがベルリン大学に就任したのは1912年であり，教授資格をもつ私講師としてであった。その2年後に彼は員外教授となるが，正教授に昇任したのは1930年である。この余りに遅い昇任は，ハルケ教授によれば決してリュールが怠惰であったからではない。彼が1920年代において，ドイツ国内のみならず国際的にも名声を得ていたことを，ハルケ教授は3つの理由を挙げて指摘している(Harke (Hrsg.)，1984, S. 17)。第1に彼の著作が内外の雑誌で論評されたこと[16]，第2にユトレヒト大学やグライフスヴァルト大学，更にはウィーン商科大学から彼に対して教授就任の招聘があったこと[17]，第3にパリで1931年に開催された国際地理学会議でリュールは唯一のドイツ人地理学者として報告することが許されたこと[18]，それもドゥマンジョン(Demangeon)が個人的にリュールを招いたからであって，当時ドイツ人が国際地理学連合から閉め出されていたことを考えればこれは異例のことであるという（Harke

(Hrsg.), 1984, S. 17)。

何故，リュールの正教授昇任にペンクとクレープスは反対したのだろうか。この点についてハルケ教授はその論稿ではっきりとした解答を与えていない。しかし，筆者に語ってくれたことによれば，第1次世界大戦の敗北によってドイツが陥った状況に対して地理学が何をなしうるか，これに関するペンクの考えとリュールの研究活動がそぐわないものであったからだとのことである。つまり，地理学が社会的に担っている最も重要な役割は教育にあり，そこではヴェルサイユ体制によって失われたドイツの一部が依然としてドイツであることを青少年に教えることが，少くともヴァイマル共和国に共感を示さない人々によって期待されたのだという。大学での地理学研究もその一端を担うべきことが期待されていたし，ペンクはその推進者の1人であったという[19]。ヴァイマル時代のドイツ文化を生き生きと描いたラカー (Laqueur) は，「反ワイマルの大学」と題する章の中で「自然科学者や地理学者や医学者のなかでも，あらゆる機会を利用して『体制』を攻撃し，古き良き時代を郷愁をもって語る者たちが少なくなかった」(Laqueur, 1974, 翻訳 p. 230) と書いているが，その地理学者の筆頭に立っていたのはペンクだったのである。

ハルケ教授は，その当時の地理学界のイデオロギー的状況を物語る最良の事実として，エミール・マイネン (Emil Meynen)[20]の活動を筆者に話してくれた。これは教授の第1論稿に詳しく書かれている(Harke(Hrsg.), 1984, S. 19—20) ので，その要点を紹介しよう。

1941年，当時ベルリンの大学で講師をしていたマイネンは，『民族ドイツ学術振興会10周年報告 ㊙』(Meynen, 1941) なるものを執筆した。ここで注意されるべきは，10周年とは1931年から1940年までの期間をさしていることであり，それ故ヒトラーが首相になる2年前にこの機関ができていた，ということである。又，訳文ではわからなくなってしまっているが，この振興会は原文で複数形になっていることも注意されなければならない。マイネンがその報告書を執筆したのは，各地に設立された『民族ド

イツ学術振興会』の連結環としての機能を果たすために1934年に設置されたベルリン事務局の局長を勤めた人物だから，とのことである。民族ドイツ（フォルクス・ドイチェ）とは何か。それは，1937年当時のドイツ及びオーストリアの国境外で生活しているドイツ系の住民を意味する言葉で，ナチス特有の用語である。ポーランド，チェコ・スロバキア，イタリア，フランスなどに生活しているフォルクス・ドイチェの領域は典型的にドイツ的（urdeutsch）な所であり，ライヒに統合されるべき場所である，というのはよく知られたナチスの論理であるが，その政権獲得以前にフォルクス・ドイチェの思想を具現化する機関が設立されていたことは注目に値する。この機関からの資金で地誌研究に従事する地理学者がそのような思想に共鳴していたかどうかは別問題であるが，ハルケ教授の考えによれば少くともマイネンはフォルクス・ドイチェの思想をもっていたし，それを積極的に推進してきたとされている。その証左として上記の秘密報告書から引用された文章は次の通りである。

「"民族ドイツ学術振興会は，公的に出現することを避けてきた。これは，とりわけライヒ外の共同研究者のことを考慮してのことである"（S. 6……この引用頁は秘密報告書の頁。以下"印のあとの数字も同様）。"国境地帯のドイツ人に関するこれまでの研究は，余りにも一面的に専門化されていたという欠陥をもっていた"（S. 7）。"政治的指導と資金調達に共同で責任を負う外務省と内務省"の支持に基づいて，"政治的に方向を定められた民族及び国土の共同研究に発展すること"（S. 7）は，これに関る諸学問にとって重要なことである。"北及び東ドイツ学術振興会（単数……筆者注）は，自らの管轄領域である上述の諸国のドイツ人の中に若いチームを発足させ，ならびにライヒの中で学問上の後進を育て，東方ドイツの研究に導きいれることに成功した。……その主要な任務はずっと以前から，ポーランド人に対抗することであった"（S. 8—9）。附属の"ベルリン出版局"は，"敵対的な出版物を観察し，これに対して首尾一貫して管理されたドイツの文献を対置する（1932年以降）"という任務をもっていた（S.

10)。ここでは〝異民族の文献と異民族の著者とその立場に関する厖大なカード目録がつくられ〟もした。〝そのカード目録はその後の闘争の時代において非常に重要であった〟。出版局は次のような意味をもつ多くのカードを準備した。つまり〝その民族政治的及び学問的意義が戦時において最も強く判明し，それを利用する数多くの国家機関，党機関，国防軍機関に認められることができた〟カードである (S. 11)。〝アルプス地方学術振興会と同様，東南ドイツ学術振興会はハッシンガー教授の指導のもとでその仕事を1932年に，いわば敵対的な境遇の中で始めた。これは，しばしば偽装してのみ遂行可能になった〟(S. 12)」(Harke (Hrsg.), 1984, S. 19—20)。

このような性格をもつ団体が，どのような経緯で発足したのかはわからない。又，当時の大御所ペンクがどのような関りをそれに持っていたのかあるいはいなかったのか，ということは明らかにされていない。ハルケ教授が断言していることは，少くともリュールはそのような「研究」に関与しなかったということである (Harke (Hrsg.), 1984, S. 20)。

以上のような「民族ドイツ学術振興会」の本格的活動は，たとえこれが1931年に設立されていたとはいえ，恐らくナチスの政権獲得後のことではないだろうか。各地にそのような種類のものが設立され始めた後，中央の統制を受けるようになったのは1934年設置のベルリン事務局があって初めて可能となった，と思われるからである。ハルケ教授によって引用された文章が示す余りにも見え透いた帝国主義的性格は，1930年前後においてまだそれほど顕在化していなかったとみるべきかもしれない。

ハルケ教授の記述だけでは曖昧模糊としている部分があるが，それにも拘らず，フォルクス・ドイチェの思想が生みだされてくる基盤を，又これを積極的に担うことを妨げさせない何物かを，両大戦間期のドイツ地理学界は持っていたとみてよいのではなかろうか。そのチャンピオンがペンクであり，対抗者がリュールだったとし，このイデオロギー的対立からリュールの正教授昇任に対してペンクやその後継者クレープスが反対したと考

えることもできる。

しかし，我々はペンクやクレープスの言い分を聞いてみてもよかろう。フンボルト大学文書館には，ペンクとクレープスの筆になると思われる文書がある[21] (Penck und Krebs, 1930)。これは，リュールの正教授昇任の学部決定に対して地理学教室は反対であったということを，少数意見として政府に提出するために書かれたものである (Penck und Krebs, 1930, Bl. 90)。この中で，リュールの正教授就任に反対した理由が述べられているので，それをみてみよう。

「我々の異議は，リュールの学問的業績に対してこの専門分野の中でくだされた評価がごくわずかなものである，ということに基づいている。確かに彼の著作の2，3は賞賛されたが，しかしドイツの大学や工科大学のどの学部も，かつて彼を招聘提案の第1順位に指名したことはなかった。何年か過去のことに属する全くわずかな場合にのみ，関連するポスト補充提案の中で取りあげられたにすぎない。それは，リュールが我々の大学で教えるようになって以来，ポスト補充で招聘された20を上回る正教授職に関る問題なのである。7人もの教授がベルリンで講師をしていたのである。それ故，教授招聘に際してリュールが著しく無視されたのは，ベルリンに対する反感があったからだというわけではないことがわかる。

「しかし，その事実はリュールがここで教えていた分野の偏狭さと関連していると考えるならば，これも又誤りであろう。なるほど経済地理学の員外教授として彼には我々の大学で地理学の1部門を担当することが委ねられている。しかし，彼はベルリン工科大学で地理学の全分野に関する講義を委嘱されていたのである。それ故，彼にとって翼は決して切り取られていたわけではない。にも拘らず彼が飛びたたなかったとすれば，それは彼の学問的不妊性のせいなのである。リヒトホーフェン学派の出身である彼は，当初地形研究を行っていたが，カタロニアにおける彼の研究は視点の的確性を見失わせてしまった。それから彼はデービスの学説に眼を向けたが，しかしこの巨匠の随員に留まっていた。これは，彼が海洋学教室の

1部門の長となり，教室の国民経済・歴史部門の創設を委嘱された時，彼にとって大きなプラスの要因となりはした。しかしここにおいて，彼は期待された成果を全くあげなかったのである。19年間その地位に彼はいるにも拘らず，この部門は今日まだ存在していない。員外教授に任命されたことも彼にとっては何の刺激にもならなかった。彼はこれまでのところ，大学で非常に求められる対象であり，それ故受講生も多い講義を行うだけであった。しかし，リュールは決して学派をつくらなかった。彼のもとで書かれた博士論文はたったひとつしかなく，これはフライブルクで受領された。彼の経済地理学分野での学問的活動は，地理学としてのその性格を疑うことから始められた。彼の後の著作からもわかることだが，彼は経済地理学の課題よりも，我々の大学で非常に強く主張されている経済学の課題を念頭においていたのである。諸民族の経済精神に関する研究は，たとえ興味深いものだとしても，全く非地理学的なものである。農業地理における立地問題に関する研究は，地理学的問題を回避する統計的な類の著作である。ここに表明されているこの学問分野の目標設定が不確実なものであることによって，それに市民権を与えることが彼の責務であったのだが，経済地理学の育成のためのあらゆる外的状況が与えられているにも拘らず，ベルリン大学の学問的営為の中で経済地理学は何の役割も果たさないという結果がもたらされているのである。……」(Penck und Krebs, 1930, Bl 90—92)。

ペンクとクレープスの文には明晰さを欠くところが散見されるが，上の引用文から，リュールの正教授昇任に彼らが反対した理由を4点見出せる。ひとつは，リュールが他の大学から正教授に値する人物とみなされることがなかったということ，第2にリュールの研究していることはペンクやクレープスの眼からみて地理学と言えるものではないこと，第3に後進を育てる力がないと判断されたこと，そして第4に教室行政の点でも成果を挙げていないこと，以上である。

このようなペンクとクレープスの見解がどこまで当を得たものである

か，疑わしい。第1の他大学から正教授に値する人物とみなされることがなかったというのはまちがいで，ペンクら自身，この文書の中でウィーン商科大学からの招聘があった事実を指摘している(Penck und Krebs, 1930, Bl. 92—93)。その際，リュールがベルリンに留まる決意をした理由は，ベルリン大学での俸給の他にベルリン工科大学からも手当てを得ていた彼にとってウィーンに行けば収入が大きく減少するからだ，とペンクとクレープスは書いている (Penck und Krebs, 1930, Bl. 92—93)。この指摘自体は正しかったかもしれないが，そのようなことを政府に提出する文書の中に記すことは，彼らの言が中傷のためになされているのではないか，という疑問を起こさせる。

第2の点はペンクらからみればそうだということであって，学界全体をみれば必ずしもそうとは言えない。ハルケ教授が指摘しているように，1931年のパリにおける国際地理学会議に招かれて報告をしたということは，とりもなおさずリュールが世界で認められていた地理学者であることを意味するものであろう。又，彼の正教授昇任に際してはアルフレート・ヘットナー (Alfred Hettner) も鑑定書を書いており，そこではリュールが正教授にふさわしいとされているからである[22] (Hettner, 1930)。ヘットナーは，リュールがデービス理論のドイツにおける唱道者としてたち現われた時，彼を最も厳しく批判した人の一人であったにも拘らずである (Hettner, 1930)。

第3の理由は今の筆者にとってなんとも判断し難いことである。ただ，教室の大ボス小ボスが眼を光らせている中で，敢えてリュールにつこうとする学生がどれだけいるか疑問であろうし，むしろ逆にリュールが学生を魅了するような講義を行ったことはペンクらも認めている通りである。そうした学生の1人としてハルトケがいることは，先に引用した彼の言葉からもわかる[23]。学生を魅きつける力をもつ人間が，後進を育てることができないというのも奇妙な話である。

第4の理由である海洋学教室内の部門設立の不首尾は，事実なのだろ

う。しかし，ハルケ教授によれば，リュールが海洋学教室内につくった経済地理学専門の図書室はその種のものとしては当時のドイツで唯一のものであり，ここに集められた図書は第2次世界大戦中に移転され，現在ハンブルク大学の経済地理学教室に「リュール文庫 (Bestand Rühl)」の名のもとで設置されているとのことである (Harke (Hrsg.), 1984, S. 14)。学問のひとつの礎をリュールが築いたことをこれは意味しており，そうであるとすればペンクらの非難が正当かどうか，これも又怪しいことになろう。

このようにみてくれば，ペンクとクレープスの反対には他人をして納得させるような明快な根拠がなかったと言わざるをえない。せいぜいのところ，彼らの考える地理学とリュールの求めた地理学との相違が，彼らにとって気にいるものではなかったというかなり低次元の理由しかなかったということになる。もっとも，ペンクらからすれば地理学の性格ははっきりとしており，これからはずれる研究ばかりしているリュールを地理学の正教授と認めることができないのは当然なのかもしれない。そう考える背景にあったのが，後にナチスの領土拡張政策につながるようなイデオロギー的基盤を用意する側に与したかそうでなかったかという抜き差しならない思想的対立である，とハルケ教授は主張しているのである。

それとの関連で見過せないのは，リュールの出自である。ハルケ教授の第1論稿で明らかにされていることのひとつは，リュールがユダヤの血をひく者であったということである (Harke (Hrsg), 1984, S. 18—19)。1934年秋に作成されたリュールに関する大学の人事書類には，次のような文が記されていたとのことである。

「非アーリア人であるが，子供の時に洗礼を施された祖父がいる。1912年4月6日に定員内公務員に任命されたが故に公務員として留任してきた」(Harke (Hrsg.), 1984, S. 18)。

この祖父とは，チューリヒ，ハイデルベルク，ゲッティンゲンで解剖学と病理学の教授を勤めた母方のヤーコプ・ヘンレであって，非アーリア人

というのはユダヤ人のことをこの場合意味する。それ故，アルフレート・リュール自身がユダヤ教の信者であったか否かとは関りなしに，ユダヤの血をひく母をもつが故にナチス政権の時代に彼もユダヤ人であるとみなされざるをえなかったことになる。

言い伝えられていることによれば，とハルケ教授は書いているが，リュールは1934年に反動の側に立つ学生たちとのっぴきならぬ衝突を経験したとのことである。やはりこの1934年に，友人たちとの会話の中でリュールは自らに問いかけるかのように次のような疑問を口にした，という話も書かれている。

「教室の中の同僚の誰が，ファシズムのイデオロギーと圧力に屈していないだろうか」[24] (Harke (Hrsg.), S. 18)。

考えてみれば，リュールが「レーマンと世界経済」という標題でアウタルキー政策の愚を揶揄する記事を寄稿した *Berliner Tageblatt* (Troll, 1947, S. 39) は，ユダヤ人編集者の新聞でありユダヤ人の寄稿の多いことで知られているものであった (Laqueur, 1974, 邦訳 p. 89)。そして，そもそも両大戦間期のドイツ，即ちヴァイマル共和国は，右翼や古きよき帝政時代の秩序を懐旧する保守派の人々にとって，ユダヤ人の牛耳る非ドイツ的な醜悪物とみなされていたのである[25]。このような背景を考慮にいれるならば，リュールの正教授昇任にペンクやクレープスが強く反対したのは，「あれは地理学ではない」という建前の理由とは別に，ユダヤ人に正教授のポストを与えることはできないという本音があったからだ，と想像することもできよう。あるいは，リュールの出自が当時そこまでわかっていなかったとしても，彼が親仏的であることはパリでの国際地理学会議に招かれた唯一のドイツ人であることから明白であり，そのことがペンクらにとっておもしろくないことだったのかもしれない[26]。

彼らの反対にも拘らず，結局のところリュールが正教授職に就くことができたのはどのようにしてなのか，という疑問も生じてこよう。それは，ベルリン大学の歴史地理学の代表者が推したからであり，リュールの属す

る哲学部での投票の結果が彼に有利に作用したからだと思われる[27]。ペンクとクレープスは前述の文書の中で次のように書いている。

「歴史地理学の代表者によって提案された員外教授アルフレート・リュール博士の正教授昇任に関する委員会審議は，何度も行われてきた。当初この提案は，それは困難であるという疑念を表明した地理学の分野全体の代表者の反対にあって，頓座した。学部長が拡大委員会にその案件を持ち出した時も，形式的な投票が不必要であると判断されるほどに，激しい反対にその提案はでくわした。後になって初めて，形式的投票が文書でなされた。しかし本分野の代表者は，その際なんの相談も受けなかった」(Penck und Krebs, 1930, Bl. 90)。

このような強い反対をくぐり抜けて正教授に昇任したリュールを待っていたものは，両眼の網膜剝離という難病であった。1934年春に，ベルリンの民間病院に手術のため入院したリュールを見舞った若い同僚[28]に対して，「私のような盲人はドイツでは生きていけない」と語ったとのことである (Harke (Hrsg.), 1984, S. 21)。このベルリンでの手術に成功しなかったのか，同年末に彼は再び手術を，今度はオランダのユトレヒトで受けた[29]。そうした手術の費用の支払いにも事欠いたリュールは，助成金を政府に請うたが第1回目の手術に要した1800ライヒスマルクのコストに対して300ライヒスマルクだけしか，補助されなかったし，第2回目の手術に対しては全く助成金を得られなかった。この2回目の申請に対する拒否は1935年5月にくだされた (Harke (Hrsg.), 1984, S. 21)。

こうして精神的にも肉体的にも危機に陥っていたリュールは，1935年の夏，スイスのフィーアヴァルトシュテッターゼー湖畔に保養に出かけたが，同年8月13日，湖畔のモルシャハで急死した。その死因は遂に不明のまま現在でもわからない。シュヴィーツ戸籍局(Zivilstandesamt Schwyz)には「リュール博士はシュヴィーツ州モルシャハのフローアルプ Frohalp 保養所からシュヴィーツ州病院に運ばれる途中亡くなった」という記録しか残っていない，とハルケ教授は書いている (Harke (Hrsg.), 1984, S.

21—22)。しかし，当時リュール急死の報が伝わるや，自殺だという噂がベルリンでは広まったとのことである。

彼の遺体は，1935年9月21日，イエーナに眠る両親の墓の傍に葬られた，とのことである。

＊＊＊＊

リュールの境涯について，当時のドイツ地理学界のイデオロギー的状況との関連でハルケ教授の論稿と教示から知りうることは，大略以上の通りである。

このような紹介に対して，トゥロルの論文（Troll, 1947）を読んだことのある人ならば，果たしてそのようにリュールをめぐる当時の地理学界の状況を描いてよいのだろうか，と疑問に思うに違いあるまい。ナチスに奉仕したのはゲオポリティクであって地理学全体ではないし，ペンクらが追求したものもハルケ教授が考えるものと大きく異なっている，ということがトゥロル論文から読み取れる。

「学術政策におけるもうひとつの変化は，1938年秋から1939年の開戦までの期間に生じた。それまでの間に，第三帝国の民族政策にとってもドイツの民族及び文化地域研究の事実に則した成果が役に立っていた。これは第1次世界大戦後，例えばアルブレヒト・ペンクを代表とするドイツ地理学の強力な参加のもとに生みだされていたし，彼が当時ヨーロッパの新しい国境区分のために国際的に要求し，ヴェルサイユ，サンジェルマン及びトゥリアノンの平和条約で（残念ながら部分的にでしかないが）用いられた民族概念から出発したものである。ドイツ地理学はそれに続いて，その都度国法で一義的に定められた領域のための言葉である〝ドイチェ・ライヒ〟という概念を，ドイツ人の土地，即ちドイツ語を話す人々が住む領域のための言葉である〝ドイチュラント〟という概念から，明瞭に区別することにひとつの重要な課題をみてきた」（Troll, 1947, S. 6—7)。

このトゥロルによる両大戦間期ドイツ地理学の評価とハルケ教授の評価

とのどちらが正鵠を得たものであるのか，これを判断する材料を残念ながら筆者はまだ持ちあわせていない。しかし，トゥロルのリュールという人物に対する評価は，「ドイツ地理学界から，当時，経済地理学に関する方法論的に重要な大きな著作を期待された人であるが，しかし精神の圧迫のために最早世間とうまく折りあわなかった人であるリュールは，その後まもなく慈悲深い運命によってこの世を去った」(Troll, 1947, S. 6) と記す類のものである。又，「地理学は逆に，それ以前の何10年かの間，人間の機能に作用するまさしく外部からの自然の影響に対する安全対策を一方の側から講ずるという時代であったのであり，まことに多くの地理学者が地理学を〝関係の科学〟としてこの影響の研究にのみ限定したいと願っていた。それどころか，この段階を地理学は既に1933年に自らの内部からほとんど克服していたのである」(Troll, 1947, S. 5) と記したトゥロルが，その克服していた証左として注で言及したのは，リュールの遺著なのである[30]。

既に明らかにしたように，トゥロルがここで引例しているリュールの地理学論は，当時のドイツ地理学界では受講生を除いて受け容れられていないものだったのである。リュールの同僚だったトゥロルが，従って，リュールの正教授昇任の反対の側にまわっていたかもしれない[31]トゥロルが，戦後になってそのようにリュールを高く評価するのは一体どういうことなのか，という疑問も禁じえない。確かに，ハルケ教授の論稿や面談からは公式マルクス主義的な思考がうかがえるし，そうした立場からのナチスとの関係でのペンク評価は否定的なものにならざるをえないであろう。しかし，他方で，類似の自己正当化はトゥロルにもあると言わざるをえないのではなかろうか。

我々は，さまざまな自己正当化という夾雑物を濾過して，実際に起こったこと，実際に考えられていたことを再現すべきであろう。そのようにして，ゲオポリティクに限ることなく，地理学がナチス政権獲得にあるいはその政策に，如何にして荷担したのかしなかったのかというテーマと関ら

せて，別言すれば如何にヴァイマル共和国に地理学が敵対したのかしなかったのかという問題と関らせて，ヴァイマル時代からナチスの時代にかけてのドイツ経済地理学の思想的展開を描き出してみたい，と筆者は考えている。

<付記> このような文章をものすることができたのは，本論で言及した機関及びハルケ，パウルカート，シェルフ3教授のおかげである。深く感謝の意を表したい。又，本稿は昭和59年度文部省科学研究費補助金，総合研究A「地理学思想における認識論的諸問題」(課題番号 59380021 研究代表者 九州大学教授野澤秀樹）による研究成果の1部である。

注

1) この遺影はリュールの遺著 (Rühl, 1938) から再録されたものである。コロキウム報告書には「今までに知られている唯一の写真」(Harke (Hrsg.), 1984, S. 3) と注記されている。しかし，筆者がフンボルト大学地理学部門の図書室で調べた結果，リュールの写真を少くとももう1枚我々は持っていることが明らかになった。それは W. M. デービス (W. M. Davis) によって組織され，1912年に実行されたアメリカ大陸横断巡検の報告書に載っているもので，この中にはヨーロッパから参加した地理学者と案内役のデービスなど40名の肖像写真が収録されており，そのうちの1枚が若き時代のリュールの写真である (Brigham, 1915 を参照)。
2) Harke, H., Lebensweg und wichtigste Arbeitsetappen Alfred RÜHLs (Harke (Hrsg.), 1984, S. 7—22)
3) Harke, H., Alfred RÜHLs weltanschaulich-philosophische Grundposition (Harke (Hrsg.), 1984, S. 23—28)
4) Rosenkranz, E. und H. Schulz, Physisch-geographische Arbeiten (Harke (Hrsg.), 1984, S. 29—41)
5) Harke, H. und G. Jacob, Verkehrsgeographische Arbeiten (Harke (Hrsg.), 1984, S. 42—52)
6) Dischereit, M., Untersuchungen zur wirtschaftlichen Bedeutung der Ideologie (Harke (Hrsg.), 1984, S. 53—71)
7) Harke, H., Arbeiten zur Standortproblematik, (Harke (Hrsg.), 1984, S. 72—100)

8) Harke, H., RÜHL zur Frage der internationalen Arbeitsteilung (Harke (Hrsg.), 1984, S. 101—108)

9) Paulukat, I., Alfred Rühl zum Entwicklungsstand der Geographie(Harke (Hrsg.), 1984, S. 109—121)

10) 筆者は前稿（山本，1983，p. 13 及び p. 15）で，リュールのベルリン大学就任の年を1912年か1911年のどちらかであるとしておいた。これはエストライヒ（1936）とクヴェレ（Quelle, 1935）の記述がくい違っていたからである。しかし，本論で言及したフンボルト大学文書館の資料などによって，それは1912年である，とするのが正しい。

11) エストライヒは次のように述べている。「しかしそうこうするうちに，リュール自身は地形学者の陣営を去ってしまった。それでもなおリュールはデービスの方法を擁護したが故に時々たたかれたが（ついでに言えば，デービスの方法を彼は後になっても決して否定しなかった），その間に彼は全く別種類の問題に取り組むようになった。経済地理学に新しい道を切り開くのに適するであろう人物をリュールに見出したのは，アルブレヒト・ペンクの功績である。」(Oestreich, 1936, S. 145)。尚，本論を読めば分かるように，ペンクの功績であるとエストライヒが書いたのは，辛辣な皮肉であったと言わざるをえない。

12) ペンクは鑑定書の中でリュールの研究活動を2頁余にわたって紹介し評価を与えた後，最後に次のように書いている。

「リュールの大学での活動は3年以上に及んでいる。この間，フィッシャーの死後，マールブルクで地理学の責任を負うという役割が彼に与えられた。その地で彼は多くの地理学受講生を掌握し，前ゼメスターでクリュムメル Krümmel が病気になって必要となった時，新たに正教授になった。それ故，学問的活動を通じてと同様，彼は学界でよく知られるようになりうるであろうし，当学部はこのような人物に試験講義とコロキウムを免除してもよかろう。

「私はそれ故，残りの教授資格段階の許可と，試験講義及びコロキウムの免除を申請するものである。」(Penck, 1912, Bl. 26 und 26R)。

ついでながら，このペンクによる鑑定書にはブランコ Branco が同意した旨の署名を行っている。ブランコというのは，ベルリン大学で地質学の教授をしていた人間であり（Deutscher Universitäts-Kalender, Wintersemester 1909/10, S. 12）リュールの恩師の1人でもある（Rühl, 1905, S. 21)。リュールの博士論文を審査したのはリヒトホーフェンとこのブランコである。

13) ペンクはリヒトホーフェンの死後，1906年にウィーン大学からベルリン大学に招聘され，地理学教室のみならず海洋学教室の責任者を勤めるとともに，この2つのインスティテュートがおかれていた海洋学博物館の館長ともなった。

そして1917～1918年には，ベルリン大学の総長も勤めた。これについてはHaefke (1961) で確認した。

ついでながら，筆者は前稿で海洋学博物館と海洋学教室の異同，設立年代についての疑問を表明しておいた (山本，1983，pp. 14—15)。この点をフンボルト大学地理学部門の部長バウルカート教授に尋ねたところ，彼女もその正確なことを知らないとのことであった。その際，ものごとの始まりが正確にいつであったかを確定することは難しいということを例証するために，バウルカート教授はベルリン大学における地理学教室 (Geographisches Institut) の開設年代について言及した。つまり，これはリヒトホーフェンによって設立されたのであるが，しかしその正式開設年と彼がベルリン大学で地理学を講義し始めた年とは一致しないとのことである。但し，ヘフケによれば，リヒトホーフェンが1886年にベルリン大学に招聘された時，ただちに地理学教室が開設された，となっている (Haefke, 1961, S. 8)。こうしたことも含め，この大学の地理学教室の歴史については1986年の100周年記念に向けて調査中であり，海洋学教室も含めた全容はその時に出版されるであろう『100周年誌』で明らかになるとのことである。

尚，ツッカーマン (Zuckermann, 1983) は，地理学教室が1902年まで置かれていた建物とそれ以降第2次世界大戦終了時までの建物の写真を1葉ずつ掲げ (S. 12—13)，後者のキャプションとして次のように書いているので，海洋学博物館は1906年開設と判断せざるをえない。

"Ansicht des ehemaligen Gebäudes des 1906 eröffneten Museums für Meereskunde von der Dorotheenstraße (heutige Clara-Zetkin-Straße) aus, in dem sich seit 1902 das Geographische Institut zusammen mit dem Institut für Meereskunde befand (Eingang Georgenstraße 34/36)" (S. 13)

一方，海洋学教室は，ツッカーマン論文にリヒトホーフェンが1900年にその責任者となったという記述がある (S. 12) ので，同年に開設されたものと思われる。

14) ハルトケはバッティマーとの対談の中で3カ所にわたってリュールに言及している。しかし，その発言には記憶違いその他のミスに由来すると思われる誤まった内容もある。例えば，アメリカ大陸横断巡検が1911年に挙行されたと彼は発言しているが (Buttimer, 1983, p. 229)，これは1912年であるし，リュールの亡くなった土地をスイスのルガノとしているが (Buttimer, 1983, p. 230)，モルシャハが正しい。

尚，ハルケ教授はハルトケから手紙で，リュールに関するいろいろな想い出を聞いている。その中で，リュールの弟子であったとハルトケが書いていたと

のことであり，そのように公言したのはハルケ教授の知る限り，ハルトケしかいないとのことである。

15) このことをヘフケから口伝された，とハルケ教授は書いている。ヘフケは1896年生まれの，ベルリン大学で地理学を学び，戦後，フンボルト大学地理学教室の長を勤めた人物である。専攻は自然地理学で博士号取得は1925年であるが，講師に昇格したのは1947年である (Meynen, 1960)。尚，1960年頃にフンボルト大学には，上記の地理学教室のほかに，政治・経済地理学教室と地理教育の教室があり，この3つは現在，統合されて Sektion Geographie となっている。

16) 前述のように，このコロキウム報告書にはリュールの著作に対する書評一覧が載っている。そのリストをみると，仏米豪の3つの外国雑誌にリュールの『農業地理における立地問題』に対する書評が書かれていることがわかる。勿論，ドイツの主要雑誌（地理学分野のみならずシュモラー年報も含む）にも，その著作や他の著作に関する書評が載っている。

17) 但し，これに関する典拠は明示されていない。

18) ハルトケもこれを指摘している (Buttimer, 1983, p. 230)。ついでに言えば，ドゥマンジョン，ガロワ (Gallois)，ドゥ・マルトンヌ (de Martonne) らフランスの高名な地理学者とリュールは，デービスの組織したアメリカ大陸横断巡検に共に参加した間柄であり，エストライヒもその参加者の1人であった (Brigham, 1915)。

19) ドイツ民主共和国では，地形研究者としてのペンクは高く評価されているが，第1次世界大戦後に手をそめるようになった政治問題への関りは厳しい眼でみられている。例えばザンケ(Sanke, 1960, 邦訳,『地理』第16巻第5号, p. 62) のペンク観がそうであるし，ヘフケも次のように述べている。

「ペンクにあっては戦争と敗北が次のように反映している。即ち，彼は今や時に応じて政治的問題をも取り扱い，その際，往々にして徹底的に拒否されるべき政治的立場を取ったのである。」(Haefke, 1961, S. 10)。

20) マイネンは，第2次世界大戦後，ドイツ連邦共和国の「地誌研究所 Institut für Landeskunde an der Bundesanstalt für Landeskunde und Raumforschung, Bad Godesberg」の所長を勤めてきた地理学者として著名な人物である。

21) 思われる，と書いたのは，この文書の冒頭に Abschrift！(コピー！) と但し書きがあり，最後に gez. Penck, Krebs とタイプで印刷されているだけだからである。コピーである以上，又最後に gez. (署名のある，という意味) と書かれている以上，手書きの署名がなくても奇妙なことではないのかもしれな

い。筆者がバウルカート教授より入手したこの文書には，手書きの署名はペンクのものもクレーブスのものもない。

22) ヘットナーの鑑定書のこともハルケ教授によって指摘されており，そのコピーを筆者はバウルカート教授から入手した。尚，ハルケ教授は書いてないが，民族の経済精神に関するリュールの研究をヘットナーも地理学に属するものとみなしていないことが，その鑑定書からわかる。

23) 既に指摘したバッティマーとの対談の中で，ハルトケはリュールのことを他に次のように述べている。

"In Berlin, and the year is 1928. My first course had been in classical geography and was taught by Alfred Rühl, an economist as well as a geographer, who impressed me deeply." (Buttimer, 1983, p. 229)

"He was the first to introduce me to questions of values and motivations as forces in creating regional disparities all over the world. Rühl was the only German geographer who was invited to the first (sic) IGU Congress (in Paris) after the Second (sic) World War.....He made one of the strongest influences on my thinking at the time." (Buttimer, 1983, pp. 230—231)

24) リュールがファシズムという言葉をナチスを指すために使ったかどうか疑問である。

25) 例えば，ラカー (Laqueur, 1974) は次のように書いている。

「『11月犯罪人』——ドイツのために恥ずべきヴェルサイユ条約に調印した人々——に関する，別の神話も存在していた。多くの人は，ドイツの破滅をもたらした『隠れた手』や全能の力の存在をただやみくもに信じていた。……（中略）……アイスナーやラーテナウのようなやからはもちろんのこと，どうしてエーベルトやシャイデマンのようなやからが，厚かましくもかつてビスマルクが占めていた地位に座ることができたのか？ その際広く信ぜられたのは『シオンの兄弟たちの議定書』のような「文書」の存在で，最近この国に起った黙示録的出来事に責を負うべきは，ドイツ人ではなく，長い間その崩壊をもたらすべく活動してきた外国の陰謀家たちやスパイどもだということを，一片の疑問の余地なく証明したものだと考えられた。」(邦訳，pp. 6—7)

「ドイツの教養階級は，その圧倒的多数において右寄りだった。円滑に運営された効率的な国家にして，はじめて市民の忠誠を要求しうる——こういったかれらの国家のイメージに，現実のワイマル共和国は明らかに合致しないものであった。……（中略）右翼からドイツ精神を傷つける異国分子として排斥されたユダヤ人は，民主的な政党寄りか，あるいは，もっと左寄りだった（邦

訳，p. 20)

「反ユダヤ宣伝では，ワイマルがユダヤ人共和国だと主張されていた。」(邦訳，p. 88)

「ユダヤ人あっての『ワイマル文化』だという反ユダヤ主義者の主張は，彼らがこの文化を憎んだという意味では正しかった。どんな新しい，大胆な革命運動の最前線にもユダヤ人がいた。」(邦訳，p. 89)

26) 親仏的であることも，当時の保守的ドイツ人にとって好ましからざることだった。このこともラカーの著書の随所から読み取れる。例えば，次の文章をみよ。

「左翼インテリ層が，フランス――ドイツの隣国であり，特に歴史上ドイツ帝国の宿敵たるフランス――との親密な協調に肩入れしたことは，一般大衆の間では平和主義以上に不評であった。」(邦訳，p. 53)

27) リュールを推した歴史地理学の代表者が誰であるか，筆者はまだ確認してない。尚，当時のベルリン大学には神学，法学，医学，哲学の4学部があり，地理学教室は哲学部に属していた (*Deutscher Universitats-Kalender, Winter-Semester 1909/10*, 1909)。

28) ハルケ教授の話によれば，この若い同僚はハルトケのことだと思われる。ハルトケは病床にあったリュールとヴィットフォーゲルの「ゲオポリティク，地理的唯物論，そしてマルクス主義」を論じあった，とハルケ教授は筆者に語った。

29) ユトレヒトでリュールが手術を受けたのは，親友エストライヒがこの地の大学で教授を勤めていたからでもあろう。ハルケ教授によれば，遺著に収録されたリュールの写真はここでの手術の前後いずれかに撮られたものではないか，という。その根拠は，この写真でリュールのかけている眼鏡が異常に分厚く，左手には杖が握られていること，そしてオランダで出版された本に載った写真であることは，当時の情勢からしてオランダで撮影されたものである蓋然性が強いこと，などである。

30) リュールの遺著は，正教授就任後，1932年から彼がベルリン大学で行った「一般経済地理学」という講義の草稿に基づいている，とハルケ教授は指摘している (Harke (Hrsg.), 1984, S. 13)。だから，トゥロルが1933年頃のことを示すものとして，1938年出版の書物を挙げても奇妙なことではない。

31) トゥロルのベルリン大学就任は1930年であり (Beck, 1982, S. 276)，彼がリュールの正教授昇任反対の地理学教室の総意に関っていたかどうか，微妙である。

References

Beck, H.(1982)*Große Geographen. Pioniere-Außenseiter-Gelehrte,* Dietrich Reimer Verlag, Berlin

Brigham, A. P. (1915) History of the Excursion, in: *Memorial Volume of the Transcontinental Excursion of 1912 of the American Geographical Society of New York,* New York, pp. 9—45

Buttimer, A. (1983) *The Practice of Geography,* Longman, London/New York

Diederich, J. (1938) Alfred Rühl Bibliographie, in: Rühl (1938) S. 85—93

Deutscher Universitäts-Kalender 76. Ausgabe Wintersemester 1909/10 I. Teil: Die Universitäten im Deutschen Reiche (1909) Verlag von Johann Ambrosius Barth, Leipzig

Haefke, F. (1961) 150 Jahre Geographie an der Berliner Universität, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu Berlin* Mathematisch-Naturwissenschaftliche Rheie, Jg. X, S. 5—12

Harke, H. (Hrsg.) (1984) *Alfred Rühl——Ein hervorragender deutscher Geograph* 〈Materialien des Festkolloquiums der Sektion Geographie der Martin-Luther-Universität zu Halle-Wittenberg anläßlich des 100 Geburtstages von Alfred Rühl, durchgeführt am 21. 10. 1982 in Halle (ergänzt und erweitert durch Beiträge auswärtiger Autoren)〉, Halle (Saale)

Hettner, A. (1930) Brief vom 7. 5. 1930, Archiv der Humboldt-Universität zu Berlin, Bestand Philosophische Fakultät, Nr. 1475, Bl. 78—78R

Laqueur, W. (1974) *Weimar: A Cultural History 1918—1933,* London (ラカー（脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳）『ワイマル文化を生きた人々』ミネルヴァ書房, 1980年)

Meynen, E. (1941) *Die volksdeutsche Forschungsgemeinschaften. Ein Zehnjahresbericht* (geheim)

Meynen, E. (ed.) (1960) *ORBIS GEOGRAPHICUS 1960,* Franz Steiner Verlag, Wiesbaden, 1960

Oestreich, K. (1936) Alfred Rühl, in: *Geographische Zeitschrift,* 42. Jg., S. 143—147

Penck, A. (1912 a) Brief vom 26. 2. 1912, Archiv der Humboldt-Universität zu Berlin, Bestand Institut für Meereskunde 232 (R. 14), Bl. 4 RS

Penck, A. (1912 b) Gutachten vom 14. Mai 1912, Archiv der Humboldt-Universität zu Berlin, Bestand Philosophische Fakultät, Nr. 1233, Bl. 25—

26R

Penck und Krebs (1930) Ein Schriftstück vom 25. Juni 1930 (Abschrift), Archiv der Humboldt-Universität zu Berlin, Bestand Philosophische Fakultät, Nr. 1475, Bl. 90—93

Quelle, O. (1935) Alfred Rühl, in: *Petermanns Mitteilungen,* 81. Jg., S. 368—369

Rühl, A.(1905)Lebenslauf, in: Derselbe, *Beiträge zur Kenntnis der morphologischen Wirksamkeit der Meeresströmungen* Teil I, INAUGURIAL-DISSERTATION zur Erlangung der Doktorwürde genehmigt von der philosophischen Fakultät der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, Tag der Promotion: 5. August 1905, Zentral Bibliothek in Berlin (Humboldt-Universität)

Rühl, A. (1909) Geomorphologische Studien aus Katalonien, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin,* Bd. 44, S. 226—257, S. 297—316

Rühl, A. (1912) Die geographische Ursachen der italienischen Auswanderung, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin,* Bd. 47, S. 655—671

Rühl, A. (1922) Die Wirtschaftspsychologie des Spaniers, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin,* Bd. 57, S. 81—115

Rühl, A. (1927) *Vom Wirtschaftsgeist in Amerika,* Verlag Quelle und Meyer, Leipzig

Rühl, A.(1929) *Das Standortsproblem in der Landwirtschaftsgeographie; das Neuland Ostaustralien,* Veröffentlichung des Instituts für Meereskunde an der Universität Berlin, N. F. B. Historisch-volkswirtschaftliche Rheie, H. 6

Rühl, A. (1938) *Einführung in die allgemeine Wirtschaftsgeographie,* Leiden

Sanke, H. (1960) Gesellschaftlich-geographische Anschauungen der großen Geographen Berlins und seiner Universität (ザンケ (青野寿彦・上杉陽・奥山好男・高橋真一・山本公之)「社会史的にみたドイツ人文地理学史——ベルリンとベルリン大学を中心にして——」『地理』古今書院, 1971年, 第16巻第3号 pp. 86—95, 第4号 pp. 66—72, 第5号 pp. 60—65)

Troll, C. (1947) Die geographische Wissenschaft in Deutschland in den Jahren 1933 bis 1945——Eine Kritik und Rechtfertigung, in: *Erdkunde,*

Bd. 1, S. 3—48

Yamamoto, K. (1983) Alfred Rühl's Thought of Economic Geography (in Japanese with an English summary), in *Keizai-Shirin* (The Hosei University Economic Review), Vol. LI, No. 1, pp. 1—49 (山本健児「アルフレート・リュールの経済地理学」『経済志林』)

Zuckermann, B.(1983) Die Bedeutung Ferdinand von Richthofens als Geologe und Geograph, in: *Geographische Berichte,* 28. Jg., Heft 1